

スポーツ人文・応用社会科学系

氏名 やま だ り え 山田理恵 教授



主な研究テーマ

- 俘虜（捕虜）生活と体育・スポーツ活動
- 日本の伝統打球戯の変容過程と文化的価値
- オリンピック・ムーブメントとスポーツを通しての地域開発

平成25年度の研究内容とその成果

日本の伝統打球戯に関する研究では、特に絵画史料に着目し、伝統打球戯の変容過程について、絵画史料からのアプローチを試みました。毬打、打毬、打毬戯、ハマ投げなどが描かれた絵巻物、屏風絵、錦絵、挿絵等を収集・吟味し、イコノグラフィー（図像学）的研究法を援用しながら、これまでに得られた文書史料も併用して、日本の伝統打球戯が、時代の移り変わりや社会の変化のなかで、形態と目的・意味がどのように変容しながら行われていたのかを考察しました。絵画史料からのアプローチは、日本の伝統的運動文化の展開を考察するうえで有効であることにも言及しました。

また、学校教育プログラムに生きる日本の伝統打球戯という観点から、日本各地に伝わる伝統打球戯についても継続して現地調査および史料調査・史料吟味を行い、それらの意義と在り方について考察しました。さらに、薩摩の伝統遊戯・ハマ投げを継承し発展させるための方法の検討と実践も継続して進め、第13回学長杯破魔投げ大会を開催しました。

これまで行ってきた俘虜研究や、スポーツを通しての地域開発という新たなテーマについても取り組みました。

また、2013年が今日のオリンピックを創始したフランスの貴族ピエール・ド・クーベルタン（1863-1937）生誕150年にあたることを機に、同年11月10日に鹿屋体育大学主催で開催した、オリンピックの過去と現在を繋ぐイベントを通して、オリンピック・ムーブメントの推進と情報発信を行うとともに、オリンピック・ムーブメントの在り方や課題を考察しました。

このイベントは、「オリンピック精神とスポーツの価値—今、スポーツ界に求められるもの—」をテーマとし、その開催趣旨は、オリンピックの原点を振り返りながらスポーツ文化への理解を深めるとともに、暴力や虐待、ドーピングなど倫理的な問題が暗い影を落としている今日の日本のスポーツ界に何が求められているのか、フェアなスポーツ界をめざしてどのような提言をすることができるのかを、オリンピックや参加者の方々と考察する、というものでした。第1部は、オリンピックの高平慎士



スタディオン走のスタート法
(右から3番目が高平選手) (山田撮影)



おもりを持った古代式立幅跳を
体験する高平選手 (山田撮影)

氏 (2008年北京オリンピック男子4×100mリレー銅メダリスト。富士通(株)陸上競技部所属) を招聘しての古代オリンピック競技祭の種目体験 (「スタディオン走」という直線走と、おもりを持って行う立幅跳)、第2部は、(1)クーベルタン研究者の和田浩一氏 (フェリス女学院大学准教授) による講演会、(2)為末大氏 (400mハードル。オリンピック3大会出場、世界陸上競技選手権大会2大会銅メダリスト、日本選手権5連覇。(一社)アスリートソサエティ代表理事) と高平氏とのトークショー形式での

講演会、というプログラムでした。

このイベントの経過と成果については、『鹿屋体育大学学術研究紀要』第49号 (2014年11月, 鹿屋体育大学学術情報リポジトリ) において報告する予定ですので、ご参照ください。

これからの研究の展望

俘虜生活とスポーツについても、継続して研究を進めています。

スポーツと地域開発については、日本各地に伝わる伝統的運動文化に着目し、それらの文化的価値と在り方について考察するとともに、薩摩の伝統遊戯・ハマ投げの伝承と振興のための実践も継続して行っていくこととしています。

さらに、鹿屋体育大学からオリンピック・ムーブメントの推進と情報発信を行っていきたいと考えています。



第13回鹿屋体育大学学長杯破魔^{ハマ}投げ大会より
(山田撮影)